

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標	<p><u>上位目標：事業対象地における小児結核の被害が減少する。</u></p> <p>中心6地区における本年3月から6月までの新規小児結核患者数は38人(3月)、35人(4月)、27人(5月)、24人(6月)と減少傾向にある。</p>
(2) 事業内容	<p><u>活動1：小児への結核感染予防サービスの拡大</u></p> <p>結核治療サポーター（以下サポーター）が中心となり、対象地区の各コミュニティで結核啓発活動を実施した。同活動では、家庭や店舗、市場などにおいて本事業で作成したリーフレットや紙芝居を用いて、40,622名の住民に対して結核に関する知識の普及を行った。また、特に、小児結核のハイリスクグループ（喀痰陽性患者と同居している小児、HIV陽性の小児、低栄養状態の小児）に対しては、各保健センターの結核コーナー、ART（エイズ治療）コーナー、栄養コーナー、外来などで、計14,993名に対してサポーターによる保健教育を実施した。</p> <p>3月からは毎週1回30分の結核啓発ラジオ番組を放送し、ルサカ市内の全住民に広く効率的に結核感染予防に関する情報を提供している。中心6地区では各保健センターの結核コーナー、ARTコーナー、外来の3か所にCDラジカセを置き、ラジオ放送を生放送で流すとともに、CDに録音したものを繰り返し流している。</p> <p>さらに、中心6地区のうち、ジョージおよびカニヤマの2地区では喀痰陽性患者と同居する5歳未満の子どもに対して予防投薬を行い、3月から56名が予防投薬を開始している。今後、ルサカ市保健局と協議しつつ、他の4地区においても予防投薬を開始していく予定である。</p> <p><u>活動2：小児結核の患者の早期診断の強化</u></p> <p>5月に、ルサカ市の全保健センターの医療スタッフ（医師、クリニカルオフィサー（准医師）、看護師、結核担当看護師）を対象にTB/DOTSワークショップの第1回目を開催し、対象となる保健センター21か所すべてから少なくとも1名、合計33名が参加した。同研修ではザンビアの現状と政府の方針、診断の実践について講義とワークショップを行った。この研修では、フェーズ1で南アフリカでの小児結核に関する専門研修を受講したUTH（ザンビア教育大学附属病院）の医師が、小児結核の世界的な潮流、特に早期診断が難しい小児結核の診断方法についての講義を行い、研修で学んだ知識をルサカ市の保健センターの医療スタッフへ波及させている。</p> <p>また、6地区の診断センターのうち、喀痰検査を行える5か所、胸部レントゲン撮影が行える2か所において喀痰検査キット、X線フィルムを供給した。これにより、各センターでそれぞれの検査が行えるようになった。さらに、早期診断を促進するべく、各保健センターから結核診断施設のある保健センターやUTHへの搬送サービスを実施しており、67名の小児結核患者が同サービスを活用した。</p> <p>2012年10月末に南アフリカで開催される小児結核の専門研修参</p>

加候補者のうち UTH からの 1 名が決定し、もう 1 名の候補者の選考を行っている。

#### 活動 3：結核患者のコミュニティーDOTS の徹底

コミュニティーDOTS において重要な役割を担う結核治療サポーターの活動を支援するため、ポスターやチラシ、啓発用 T シャツの制作（予防促進）、家庭訪問を行う際に使用する自転車の寄贈（治療促進）を行った。

また、結核治療に係るデータ管理能力を向上させるため、4 月に第 1 回目のデータマネジメントワークショップを開催し、各保健センターから結核担当看護師など計 19 名が参加した。結核治療の台帳、カルテ、報告書などの様式の理解を深めつつ、記録の問題点が指摘され改善策などが提案された。7 月以降、順次保健センターでコンピューター研修を行い、データ管理能力を高めるとともに、2 回目のワークショップで改善状況をフォローアップしていく予定である。

また、各診断センターにおいて喀痰検査キットが不足しないよう、4 月にルサカ市保健局の担当者と全診断センターを巡回し、在庫チェックを行うと共に不足している喀痰監査資材を供給した。

さらに、結核治療中の小児と親を対象に、各自が抱える不安や質問に答える「患者治療集会」、治療終了後に行う「治療卒業式」を定期的で開催し、長期に渡る結核治療を精神面からサポートしている。

#### 活動 4：低栄養状態にある小児結核患者を対象とした栄養支援サービスへのアクセスの改善

小児結核の患者とその親のべ 185 組（370 名）に対して「栄養教室」を開催した。栄養教室では、栄養状況モニタリングを行い低栄養状態にある小児には当団体が自己資金で運営する栄養プログラムを通して HEPS（大豆をベースにした栄養補助食品）の食糧支援を行っており、46 名の低栄養児がその支援を受けた。またフェーズ 2 より栄養教室時に「家庭菜園普及講座」を行い、自宅で家庭菜園を行えるよう野菜のタネや肥料などのキットを提供している。

#### 活動 5：結核治療サポーターの役割と持続性の強化

中心 6 地区の結核治療サポーターは自分たちで立案したコミュニティーでの結核啓発活動、サポーター月例会集会を計画通りに実施している。6 月末までに、フェーズ 2 より新たに事業対象となった 12 の保健センターを対象にサポーター養成研修を行い、118 名の結核治療サポーターが育成された。今後、中心 6 地区と新規の 12 地区の間でのサポーター同士が交流する相互訪問活動などを行っていく。

サポーターの中から特に意欲が高く優秀な人材を選抜し、5 月に家庭菜園研修、PC スキル研修を実施した。ここで研修を受けたサポーターは、家庭菜園普及講座、保健センターでのデータ管理業務などで、他のサポーターのモデルとなって活動を行っている。

活動詳細については添付資料 1、添付資料 2 を参照。

## (3) 達成された効果

**プロジェクト目標：事業対象地のコミュニティにおける小児結核対策サービスが拡充する。****指標1：中心6地区にて小児結核ハイリスクグループが結核対策にアクセスする機会が増える。**

下記の通り、小児結核の各ハイリスクグループが結核対策へアクセスする機会が増加している。

- ① 喀痰陽性患者と同居している小児のうちジョージとカニヤマの2地区において56名が予防投薬を開始した。
- ② HIV陽性の小児に対して各保健センターのART（エイズ治療）コーナーで結核予防教育を実施し、6月末までに1,587名が参加した。
- ③ 低栄養の小児に対し、栄養コーナーでの結核予防教育を開始し、6月末までに400名が受講した。3月から6月までの4か月間で栄養教室に参加した小児結核患者のうち46名の低栄養児が食糧支援を受けた。

ARTコーナー、栄養コーナーでの結核予防教育はフェーズ2より新たに開始しており、ハイリスクグループが結核対策にアクセスする機会は増加していると言える。

**指標2：中心6地区において、小児結核患者が診断までにかかった平均期間が短縮する。**

小児結核治療卒業式に参加した84名へのアンケート調査によると、診断までの平均所要時間は3.7か月（3月）、7.8か月（4月）、5.4か月（5月）、4.2か月（6月）となっている。昨年度1年間の平均所要時間が8.3か月であったことから、診断までの平均期間は短縮傾向にあると言える。

**指標3：ルサカ市内の全保健センターが結核データを毎月ルサカ市保健局へ報告できる。**

各保健センターの月例報告は翌月7日までにルサカ市保健局へ報告されるようになっている。多少の遅れは見られるものの、毎月の報告がなされている。

**指標4：中心6地区で小児結核の治療脱落患者数が増加しない。**

昨年1年間の脱落者が11件であったのに対し、6月末までの脱落者は0件であり、中心6地区の小児結核の治療脱落者数は減少傾向にあると言える（治療中の死亡ケースが3件）。

なお、中心6地区以外のチャザンガ保健センターの看護師によると、これまで29件の脱落者（成人・小児患者の合計）が存在したが、5月に本事業の結核治療サポーター養成研修が実施された後、受講した結核治療サポーターの働きにより6月にそのうちの5名が追跡できたとのことであり、中心6地区以外の結核治療脱落者の減少にも貢献できている。

(4) 今後の見通し	<p>本事業はルサカ市保健局、各保健センターの協力ならびに結核治療サポーターや関係者の献身的な活動に支えられ、活動は順調に進捗し、高い成果を上げつつある。プロジェクト目標も達成傾向にあり、上位目標もフェーズ1からの事業効果が現れ始めている。現段階におけるプロジェクト目標並びに上位目標の達成状況から、当初3年計画で立案された本事業は現行のフェーズ2において当初の目標を達成するものと考えられる。また保健行政の政策、結核治療サポーターの活動状況から、自立発展性も期待できるものと判断する。</p> <p>成果、プロジェクト目標の指標に対して、各保健センターのデータの収集方法に不十分な点がみられるため、今後データ管理研修を通じて質の向上を促していく。</p>
------------	--